ISSN 2434-3072

1910s

1960s

北海道大学150年史 編集ニュース

第 8 号　　2022年3月31日

目　次

〔巻頭コラム〕
大学創立年と前史のさまざま
井上高聡 …… 2
〔北大歴史ノート　第８話〕
外国語授業の思い出 …… 4
〔北大風景グラフⅧ〕
白堊館（工学部旧本館） …… 5
〔資料紹介〕収蔵庫さんぽ …… 6
〔活動紹介〕日誌 pick up …… 7
〔編集後記等〕 …… 8

1980s

〔巻頭コラム〕

大学創立年と前史のさまざま

井上 高聡
（大学文書館准教授）

前号のコラムでは、北海道大学が「創基」という独自の用語を用いて、札幌農学校開校の1876年に大学の起点を置いていることに触れました。大学の創立年をどこに定めるか、前史をどう描くかは、大学の基本理念や建学精神に関わる重要な問題です。また、大学沿革史編纂においても、記述の要となる部分です。

(1) なぜ札幌農学校開校を起点とするか

北海道大学は画期として、札幌農学校開校の1876年のほかに、さらに前身校である開拓使仮学校の設置（1872年）、帝国大学に昇格した東北帝国大学農科大学への改組（1907年）、北海道帝国大学としての独立（1918年）、新制北海道大学の成立（1949年）などを挙げることができます。

その中で1876年に起点を置いた理由は連続性です。札幌農学校開校以来、今日まで146年間、組織としても、人的関係においても、空間的にも連続性を有しています。例えば、札幌農学校から東北帝国大学農科大学への改組では、教員も学生もそのまま新組織へ移行し、使用するキャンパス・建物も変わっていません。逆に、開拓使仮学校から札幌学校（1875年）を経て札幌農学校に至る過程では、一時的な閉校と全生徒の退校、教員の頻繁な入れ替わり、カリキュラムの大幅な変更、学校所在地の移転などが見られます。札幌農学校開校に至る試行錯誤の時代と捉えることができます。ただし、北海道「開拓」事業のための指導的人材を養成するという開拓使仮学校の設立目的は、札幌農学校が受け継いでいます。そうした意味で開拓使仮学校・札幌学校の時代を「前史」と位置付けることは、北海道大学の沿革史においては重要です。

もう一点は、札幌農学校が開校当初から「学士」称号の授与を定めたことです。卒業者に「学士」称号を授与するということは、欧米では近代的な大学の要件でした。長く「大学」を名乗れなかった札幌農学校においては、「大学」同等の高等教育機関であることを証します。1876年に起点を置くことは、札幌農学校時代から「大学」であり続けたという北海道大学の歴史的な矜持を示すと言っても良いと思います。昨今、札幌農学校が「学士」称号の授与を定めた最初の学校であるとして、「日本最初の近代的な大学」とする見方を散見します。これは誤りです。1875年、既に東京大学の前身校東京開成学校が「学位称号ヲ載スル印票」の授与を定めています。また、札幌農学校第1回卒業式の前年、1879年に東京大学法・理・文学部が第1回学位授与式を実施しています。そうした歴史的事実を踏まえ、後に東京大学が統合していく高等教育機関と共に、札幌農学校は日本における最初期の「近代的な大学」と言える、くらいの表現が穏当であると思います。

(2) 北海道大学と歴史が交差する大学

前述の通り、札幌農学校は組織的には東北帝国大学の農科大学として大学に昇格しました。1907年の東北帝国大学設置にあたり、札幌農学校を改組した農科大学と、仙台に新設する理科大学を合わせて一つの帝国大学としたわけです。しかし、理科大学の設立は1911年であるため、東北大学の歴史では、札幌の農科大学が先行します。『東北大学百年史』（2003-2010年）は、東北帝国大学が組織として成立し、農科大学単独でスタートした1907年を創立年としています。東北大学の沿革史でもう一点、特徴的なのが、ルーツ校の歴史や前史をほとんど扱っていないことです。東北帝国大学は1912年に仙台医学専門学校や仙台高等工業学校を統合しています。また、戦後の新制大学成立にあた

り第二高等学校、宮城師範学校、宮城青年師範学校、宮城県女子専門学校などを包摂しています。東北大学の沿革史は、これらに対象を広げず、法令上「大学」であった時代を記述しています。「研究第一主義」の理念に似つかわしい、硬派な沿革史であると思います。

一方、室蘭工業大学は1939年創設の室蘭高等工業学校（後に室蘭工業専門学校）を母体とし、1949年の新制大学への改組に際して北海道帝国大学附属土木専門部を包摂しました。その経緯を『室蘭工業大学百年』（1990年）では、1939年を「室蘭開学」とし、北海道帝国大学附属土木専門部のルーツを遡った札幌農学校工学科の開設（1887年）を「札幌開学」と記述して、大学の起点を1887年に置いています。北海道大学の歴史から見ると、札幌農学校工学科と附属土木専門部は、組織上、継続関係にはありません。札幌農学校工学科は卒業生に「工学士」の学位を授与した、「大学」と同等の位置づけです。附属土木専門部とその前身の札幌農学校土木工学科（1897年開設）は、工学専門技術の教授に重点を置いたコースです。「札幌開学」と位置付けるならば1897年の方が相応であると思います。しかし、北海道における工学専門教育の流れとして見るならば、室蘭工業大学の捉え方もあり得るのかも知れません。

(3) 歴史の古い大学

東京大学は、東京開成学校を法・理・文の3学部に編成し、東京医学校を医学部に改組して、法・理・文・医の4学部からなる東京大学が成立した1877年を創立年としています。東京開成学校は遡れば、江戸幕府の蕃書調所をルーツとし、明治維新政府が引き継いで、開成学校・大学南校などへ組織改編をしました。東京医学校も幕府時代の種痘所・医学所を起源とし、維新後に医学校・大学東校などに改編しています。東京大学がこれらを前史として捉え、1877年に創立年を置くのは、法・理・文・医といった分野を備えた近代的な総合大学としての出発に歴史的な重点を置いたためです。また、『東京大学百年史』（1984-1987年）は、このころに東京開成学校の関係者の間に「大学」であろうとする自負が生まれたことも指摘しています。

前史の捉え方で面白い例は、大阪大学です。大阪大学は創立年を大阪帝国大学設置の1931年としています。しかし、その前史として、緒方洪庵が1838年に設立した蘭学塾「適塾」を上げています。師弟関係や学校構想から、適塾が大阪府立医学校に繋がり、その後身校大阪医科大学が大阪帝国大学開学にあたり医学部となるためです。少々心許ない道筋にも感じられます。また、1724年に大阪商人が創設した学問所「懐徳堂」を源流に位置付ける場合があります。懐徳堂は1869年に閉校しており、大阪大学と直接的な継承関係はないのですが、その所蔵図書・資料を後に文学部が引き継ぎ、現在は「懐徳堂研究センター」を設置しています。適塾にしても、懐徳堂にしても、そこに前史を求める大阪大学の沿革意識には、東京に対する大阪の矜持と意気込みを感じます。

龍谷大学は1987-2000年に『龍谷大学三百五十年史』を刊行しました。創立の起点を、1639年に京都西本願寺内で浄土真宗教学講義を実施した「学寮」に求めています。途中、教学論争の影響で数年間休講がありますが、明治維新後には洋学も取り入れ「仏教専門大学」「仏教大学」の名称で存続します。1919年施行の大学令に基づき、1922年から「龍谷大学」として、制度上、私立大学となりました。近世に仏教宗派が設立した教学研究機関と近代的な大学を連続性において捉えるのはやや奇異に感じられます。しかし、仏教の教えに建学の理念を置き人間育成を目指す龍谷大学の立場からすれば、決して的外れな視点ではないと言えます。

大学により、創立年や前史の捉え方はさまざまです。そこに、大学の立場、自負、意思、個性を垣間見ることができ、たいへん面白く感じます。大学沿革史の探訪には、そんな楽しみもあります。

北大歴史ノート　第８話
外国語授業の思い出

札幌農学校は、1907年9月、大学に昇格して東北帝国大学農科大学となった。あわせて、高等学校相当の大学予科（修業年限3年）を附属し、卒業者の多くが東北帝国大学農科大学に進んだ。

大学予科の授業では外国語に重点がおかれ、1900年代～1910年代の在学者による回想が『札幌同窓会誌』に寄せられている。

予科では外国語の時間が非常に多く、毎日二時間か三時間はあったので、その予習に辞書を引くのに追われて、数学等の方に手が回わらなかった。おかげで毎学期のコンデー宣告には語学では五十人クラスで一人か二人なのに、数学は約半数がコンデーであった。

（中島廣吉、予科1910年卒業）

中島が入学した1907年の大学予科第1年級のカリキュラムは、週31時間の授業のうち、必修科目の第一外国語10時間（英語またはドイツ語）、随意科目の第二外国語6時間（ドイツ語または英語）であった。語学だけで手一杯になるほど予習に時間をかけた甲斐があり、学期・学年末の試験で「コンデー」（Condition Mark、追試験の対象となる60点未満）をとる生徒は少なかった。

＊

予科時代に英語を教えていただいた高杉先生は、教科書としては、吾々としては随分むつかしいシエクスピアの文学書、その他外国の書を用いました。生徒に初め解釈させ、後で先生から詳しく説明していただくのであります…

おみくじ箱を先生が教壇の上で、皆んなの見ているところでふり、無意識に一本のおみくじ棒を引き出し、その棒に書いてある番号にあたる生徒が選ばれて、予習の結果を解釈するという具合で…要するにクラス全生徒に毎時間よく予習さしてきて、学力をつけさせようとした先生の親切心で、愉快の発案でありました。

（山口謙三、予科1917年卒業）

伝統の英語は、サッカレーの「Hエスモンド」、シェクスピアの「オセロ」、カアライルの「英雄崇拝論」などが教材で、学生は語学を通じて文学を、そして更に人生を哲学する心を教えられた。　（樋口櫻五、予科1914年卒業）

高杉栄次郎（1867－1942）は、1907年～1938年に予科の講師、教授として英語を教えた。生徒に予習してきた解釈を述べさせる際には、公平のため、おみくじ箱を用意して、くじの番号で指名した。1回の講義に連続してあたることもあり、生徒は予習に気が抜けなかったという。

講義では、W.シェークスピアの『オセロ』、W.M.サッカレーの『ヘンリー・エズモンド』、T.カーライルの『英雄崇拝論』といった英文の原書を用いた。生徒には、語学のテキストにとどまらず、文学や哲学に触れる機会となった。

＊

吹田順助先生の独乙語も面白かった。レクラム版の小説で題は忘れたが相当にむつかしかったが、途中であまりキワドイから教室では遠慮すべきであるとて別の小説にとりかえられた。

（中島廣吉、予科1910年卒業）

独逸語は第二外国語などいう生やさしいものでなく、ズーデルマンの「故郷」、ヘッベルの自伝「ハイリイゲ・クリーグ」、ケヒルティの「幸福論」などの名作を取上げて大いに鍛えられた。　（樋口櫻五、予科1914年卒業）

予科時代は毎日外国語の予習に追われていた。何しろ全く習わなかった独乙語を二ヶ年で、レクラム版の原書が読めるようになったのだから、余程の努力が必要だった。

（木原均、予科1915年卒業）

吹田順助（1883－1963）は、1907年～1915年に予科の講師、教授としてドイツ語を教えた。ドイツで古典作品から学術文献、戯曲など広範な教養書を刊行していたレクラム出版社の書籍をテキストとした。ドイツ語に初めてふれる生徒にとって、単語の暗記からはじめて文学作品を読みこなすまでに至るには、相当の苦労があった。

（廣瀬）

（出典）『札幌同窓会誌』（復刊号35ページ、第2号27・53-54ページ、第5号2ページ）

北大風景グラフⅧ
白亜館（工学部旧本館）

（『北海道帝国大学一覧　昭和五年』）

（工学部電気工学科第3期卒業アルバム）

（同上アルバム）

（福冨忠男関係資料）

1924年に設置された北海道帝国大学工学部の校舎は、尖塔を備え、白みを帯びたタイルで覆われた瀟洒な建物で「白亜館」と称された。当時の大学構内図を見ると、北13条通りの北側に医学部附属医院、南側に医学部があり、通りと中央道路が交差した先に白亜館(北13条西8丁目～北14条西9丁目)が鶴翼状に配置されていた。

写真①は、手稲山を背にした1929年頃の白亜館全景である。最も高い尖塔を備えた正面玄関を中心に、向かって左に土木工学科、鉱山工学科、右に機械工学科、電気工学科の教室が配置された。

写真②は白亜館の前庭で撮影された、1930年卒業生の記念写真の1枚である。工学部機械工学科を1937年に卒業した繁富一雄は、白亜館での日々について、次のように語っている。

> 午前8時30分より講義が2時間続きます。殆(ほと)んどTECHNICAL TERMは英語又は独語でSPELLINGは初めの内は正確に書けませんでした。10分間の休みがあり次の教室に入ります。それで又2時間の講義があります。講義4時間の後昼食で1時間休憩し午後からは実験と製図です。…早く帰れても下宿には6時頃になります。その内図面を書く時間が長くなり遅い時は夜の12時頃になる時も屢々(しばしば)でした。

一日のうち、午前には「材料力学」「内燃機関」といった専門の講義があり、英語やドイツ語が専門用語に使われていた。午後には、通年で週9時間が課された講義「機械製図（甲）」など、実験や製図に多くの時間が割かれていた。

その後に増設された学科は、白亜館内に部屋を割り当てることができず、建築工学科（1948年新設）は旧附属土木専門部本館を、衛生工学科（1957年新設）は旧附属医院第一外科病室を再利用することとなった。

写真③は老朽化した白亜館の正面玄関の解体工事の様子である。白亜館の取り壊しは1963年から1972年に行われ、全ての学科が入る新たな工学部本館は1973年に完成した。

（佐々木）

（出典）北海道大学工学部同窓会『創立60周年記念誌』

〔資料紹介〕 収蔵庫さんぽ

太平洋戦争に出征した卒業生に関する資料　～楠隆旧蔵資料～

楠隆（農学部農学科1938年卒業）の旧蔵資料を、2021年6月28日より、ご子息の楠昭氏より複数回にわたって受贈しています。資料には北海中学校在学以降のアルバム、証書、辞令、書簡、原稿、新聞記事の切り抜きなどがあります。

農学部卒業後、北海道農事試験場に勤務していた楠隆は、1944年6月臨時召集を受け、色丹島に出征しました。戦後、1945年9月の武装解除後は1947年6月までシベリアに抑留されました。帰国後は元の職場に復帰して小麦の品種改良にあたり、寒さに強い秋まき小麦の新品種「北栄」を生み出しました。

寄贈資料には、軍隊手帳（軍人の身分証明書）や家族に宛てた軍事郵便など、戦時期の資料が含まれます。妹に宛てたはがきには、任地の色丹島について「何を食べて生きてゐるのだろうと不思議に思う程」カラスがいると記し、イカをくわえたカラスと追い払う兵隊の図を添えています。

（佐々木）

妹への書簡と楠隆の軍隊手帳

有馬英二博士のメダリオン　～有馬家旧蔵資料から～

2021年11月11日、ご令孫の有馬眞氏より、有馬英二博士(1883－1970)の旧蔵資料を受贈しました。有馬博士は、東京帝国大学医科大学を1908年に卒業し、東京帝国大学医科大学附属医院内科や朝鮮総督府医院での勤務を経て、1921年には北海道帝国大学医学部内科学講座の初代教授と附属医院の初代院長に着任しました。有馬博士は結核の治療・予防に力を注ぎ、1941年には財団法人北方結核研究会を設立し、大学構内に「北方結核研究所」（1945年新築）も開所しました。北方結核研究所は1950年に大学に寄附され、附置研究所として「結核研究所」が設置されました。1974年には「免疫科学研究所」に、2000年には「遺伝子病制御研究所」に改組され、現在に至ります。

内科学講座教授在職10周年記念のメダリオン

ご寄贈いただいた資料には、有馬博士の肖像画、戦前の卒業アルバム、結核に関する統計記録や論文の抜刷などの研究資料、結核研究所の雑誌『結核の研究』などがあります。

メダリオンは、有馬博士の肖像を意匠にあしらい、上部には「PROF. DR. HIDEJI ARIMA. 1931」と刻まれています。内科学講座教授在職10周年目にあたる1931年に贈られた記念品です。有馬博士は、1946年まで内科学講座教授を務めました。

（佐々木）

〔活動紹介〕 日誌 pick up

ホームカミングデー2021でオンライン展示を開催

150年史編集室では、「北海道大学ホームカミングデー2021」（9月24－25日、web開催）の特別企画として、オンライン展示「写真でたどる北大キャンパスの移り変わり 1940's-1960's」を公開しました。

展示は、1940年代～1960年代の札幌と函館のキャンパス風景を当時の写真から編成し、4本のスライドショーに仕立てています。年代ごとにキャンパス図を載せ、教養部本館に転用された古河講堂、第一農場事務所のエルムの鐘、鉄道引込線を走る石炭輸送の蒸気機関車、水産学部の川畑講堂などを紹介しました。スライドショーは、9月27日からは常設展示として、編集室webページ（https://www.hokudai.ac.jp/bunsyo/hu150_homecomingday2021.html）で公開しています。

（廣瀬）

鈴木限三予科教授の植物学講義（1942年頃）
（高須泰彦旧蔵アルバムより）

教育学部附属幼児園の保育室（1955年頃、旧市電）
（創基80周年記念スライドより）

薬学部北校舎（1960年代後半、旧附属医院伝染病室）
（寺沢浩一旧蔵アルバムより）

函館高等水産学校の相撲大会（1940年代前半）
（藤井武治旧蔵アルバムより）

編集室日誌

編集室では、北海道大学150年史の編集業務として、「資料編Ⅰ」に収録する帝国大学期の公文書・沿革資料の調査・撮影、「写真集」編纂へむけた写真資料の収集・整理をすすめました。「新型コロナウイルス感染拡大防止のための北海道大学の行動指針（BCP）」のレベルに応じて、シフト制勤務のもとで業務にあたっています。開館・開室状況は、今後もBCPレベルに応じて変更となる見込みのため、随時HPでお伝えします。お問い合わせは、電話・メール・郵便にてお寄せください。

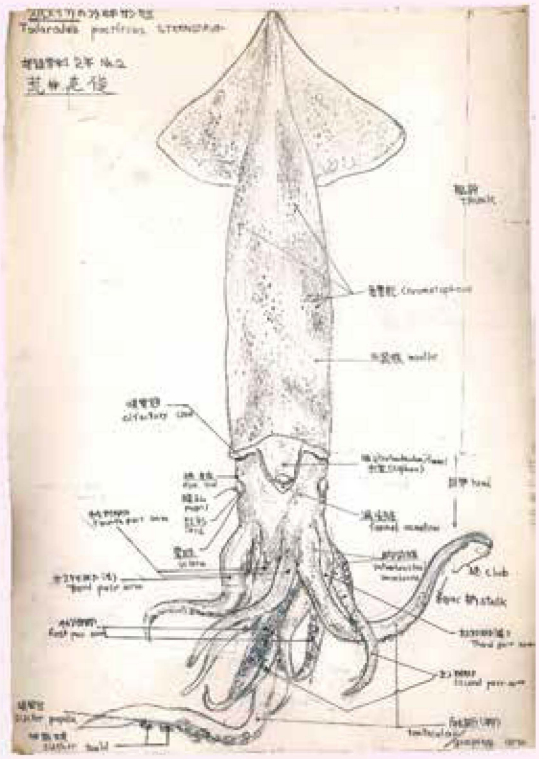
資料の収集・保存にご協力を

探しています　水産学部の資料

水産学部の歴史は、札幌農学校水産学科（1907年設置）にさかのぼります。1918年には北海道帝国大学の附属水産専門部となり、1935年に函館高等水産学校として函館に移転しました。1944年の函館水産専門学校への改称を経て、1949年に新制北海道大学の水産学部となりました。水産学部の歴史をめぐる資料や情報をお待ちしています。

『空飛ぶカレイ』
創刊号（1974年1月）

「北大水産学部釣研究会」(1973年結成)の研究会誌。日浦や大沼など、道内各地での釣りの活動記録、会員のエッセイなどが掲載されている



スルメイカのスケッチ（1973年）
「水産動物学実験」の授業で、増殖学科２年生がヒメエゾボラ(ツブ貝)、ケガニなどをスケッチしたうちの一枚
（荒井克俊氏寄贈資料）

編集後記

表紙は練習船忍路丸の変遷です。初代忍路丸は1909年に竣工しました。その後、船名「おしょろ丸」として、1927年に竣工したⅡ世（補助機関付帆船）が36年間活動し、Ⅲ世・Ⅳ世は全長約70メートルの汽船に大型化しました。現在はⅤ世（2014年竣工）が運用されています。

表紙図版――練習船　忍路丸･おしょろ丸

- 忍路丸（初代）　1910年代
  総トン数46t、帆船、1909－1926年活動
  （No.125-594）
- おしょろ丸Ⅲ世　1962年
  総トン数1,180t、汽船、1962－1983年活動
  （水産学部沿革資料）
- おしょろ丸Ⅳ世　1989年頃
  総トン数1,383t、汽船、1983－2014年活動
  （総務課資料）

北海道大学150年史編集ニュース　第8号
発行日　：2022年3月31日
編集・発行：北海道大学150年史編集室
〒060-0808
札幌市北区北8条西8丁目
北海道大学大学文書館内
開室日　：平日（月～金）9:30～16:30
（祝日、年末年始12/29～1/3を除く）
TEL/FAX　：011－706－2395
E-mail　：hu150@archives.hokudai.ac.jp
URL　：https://www.hokudai.ac.jp/bunsyo/hu150.html